

聖金曜日のための個人や少人数での祈りのしおり

「聖金曜日」は主が十字架で苦しみ死なれたことを心に刻む「主の受難日」です。

(式文ハンドブック 20 ページ)

*個人で祈るときは、会衆の部分は自分で唱えるが、キリエは会衆の部分は唱えない。

*主の祈りは新式文から抜粋・引用。

1. み名による祝福

司) 父と子と聖霊のみ名によって

会) アーメン。

2. その日の詩編

詩編 22

3. キリエ

司) 主よ、憐れんでください。

会) 主よ、憐れんでください。

司) キリストよ、憐れんでください。

会) キリストよ、憐れんでください。

司) 主よ、憐れんでください。

会) 主よ、憐れんでください。

4. その日の祈り

全) 憐れみ深い神様。御子は十字架に上げられ、全ての人々をご自身のもとへと引き寄せられました。キリストの御傷から生まれた私たちが、いつも御子のうちに憐れみを見出すことができますように。あなたと聖霊とともにただ独りの神、永遠の支配者、御子、主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

5. 聖書の朗読

(すべてを用いてもよいし、一部を用いてもよい)

イザヤ書 52:13-53:12

ヘブライ人への手紙 10:16-25 または、4:14-16 & 5:7-9

ヨハネによる福音書 18:1-19:42

6. 小説教

(少人数での礼拝の場合は一人が代読、個人での祈りの場合は黙読してもよい。
その後、沈黙や少人数での分かち合いを持つこともできる)

7. 主の祈り

(主の祈りを祈る前に、自分の言葉で祈ってもよい)

全) 天におられるわたしたちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。
わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑に陥らせず、悪からお救いください。
国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。
アーメン

(ローマ・カトリック教会／日本聖公会 共通口語訳、2000年)

8. 祝福と閉会

司) 全能の神、父と子と聖霊の祝福が、私(たち)と、離れたところにいる仲間たちと、すべての人の上にありますように。

会) アーメン。

小説教：「絶望の向こうに見える十字架」

イエス様は十字架にかかれた時、「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」と叫ばれました。これは詩編 22 篇の冒頭の言葉です。この詩編は、嘆きの言葉と賛美の言葉が交互に繰り返され、全体の大きな枠の中でも前半は嘆き、後半は賛美となっています。

今、私たちはこれまで経験したことがなかったような、新型コロナウイルス感染症の蔓延という世界的な危機に瀕しています。私たちの周りの日本ではまだその切実感は少ないのですが、中国や欧米の感染拡大と医療崩壊、数万人に及ぶ死者の数を見ると、まさに人類の危機と言っていいと思います。私たちの国でも患者数は日々増えていて、終わりが見えません。そこには病気の蔓延だけでなく、不安と苦しみ、恐れと恐怖、嘆きと悲しみもまた広まっています。このような時、この言い知れぬ不安と恐れ、嘆きを誰にぶつけていいかわかりません。「なぜわたしをお見捨てになるのか」と詩編の作者が言うように、先の見えない恐怖だけでなく、一番信頼していた神様にも見捨てられたように思うに違いありません。どんなに嘆いていても、神様は沈黙を守られるように見えます。もはやどこにも助けは見つかりません。そうなってくると、嘆きは絶望に変わります。自分の存在そのものも疑問になってきます。詩篇の作者の 7 節の、「わたしは虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥」との嘆きからは、自分のいのちや人生、存在に価値を見出すことはできない状況であることがわかります。

人には苦難と悲劇が付きまとい、嘆きが繰り返されます。しかし、嘆きは聞かれないのか、涙はぬぐわれぬのか。詩篇の作者は、その嘆きの末に、神様の存在を確信するのです。神様は沈黙されます。しかし沈黙の向こうに私の方を向いて立っておられることに気づくのです。4 節、5 節で「だがあなたは、聖所にいまし／イスラエルの賛美を受ける方。わたしたちの先祖はあなたに依り頼み／依り頼んで、救われて来た。助けを求めてあなたに叫び、救い出され／あなたに依り頼んで、裏切られたことはない。」というのです。自分に力がないからこそ、誰にも頼ることが出来ないからこそ、そこに神様が立ってくださるのです。

さらに、イエス様が十字架上で叫ばれた「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」との嘆きの言葉は、イエス様が私たちの身に起こる苦難と悲劇、理不尽さと不条理を引き受けられたことにほかならないのです。私達が

負うことのできない苦しみを、イエス様が一緒になって、いや、代わって一身に負ってくださったのです。イエス様の十字架による救い、この信仰に立つとき、私達の嘆きは絶望では終わりません。絶望の向こうに恵みがあり、救いがあります。それを信じる信仰には平安と喜びが与えられるのです。どんなときにも私たちにはイエス様の十字架の救いがあることを信じて行きたいと思います。アーメン。